

歯科 技工

THE JOURNAL OF DENTAL TECHNOLOGY

6
JUN.

1998 Vol.26 No.6



■特集

最近の各種矯正装置の製作法とその要件

—美しい歯列を作るために必要な矯正装置の製作方法を再認識する

横井欣弘・百瀬之男・高山哲仁・橋浦紀夫・草薙恵介

■連載

●レジンから歯科技工が見える

—総括・技工全工程 2.分離剤塗布から重合・割り出しまで

寺岡文雄・高橋純直

●ヨーロッパに学ぶ!! ひとに優しいラボ環境

—第6回(完) Dentallabor Thiévent

山下敦子

●ミリングの“先”の世界—可撤性・半固定性補綴物の「適合する」上部構造の製作法

Lesson4 (完) パーシャルデンチャーの予知性と目的・機能を向上させる

スタビライジングアームの構造と上部構造製作

佐藤幸司

●知っておきたい! 感染症の基礎知識

—第6回(完) 結核(tuberculosis)

石川泰樹・渋谷敬一

「臨床的な予防がわかる・補綴と技工の概念が変わる 一歯にダメージを与えない補綴物を製作しよう—に参加して

歯科衛生士と歯科技工士が生かされる臨床とは

●はじめに

去る3月15日(日)、標記ワークショップが開催された。今回ほど筆者にとって興味深い講師の方々の組み合わせはなかった。予防を主体とする診療に取り組み、3月にヘルスケア歯科研究会を立ち上げられた熊谷崇先生(日吉歯科診療所)、ポーセレンの開発に関わり、審美歯科の第一人者として世界的に活躍されている桑田正博先生(クワカレッジ)、そして日本の歯科医療に疑問を抱きながらも本来の歯科技工を模索されている加藤敏明先生(Laboratory of Oral Principle)、まさに時代を象徴する先生方であった。

3月18日の朝日新聞の社説に「歯の健康に総合戦略を」というタイトルで歯科医療革命の記述が取り上げられてきたのも、まさにその転換期に直面しているということをおもわせるものであった。

●基調講演

最初に桑田先生から「口腔単位から一人間単位の治療」の必要性が挙げられ、補綴物と歯肉の調和に必要なコントゥアガイドラインを、エステティックピークとファンクショナルピークの使い分けにより説明され、審美と機能そして予防性について説明された。

次に加藤先生から、今までキャストインレーを作ってきたが、本当にそれには意味があったのか。またクラウンの適合性を追求して10 μ mの精度まで可能にし、装着

時のセメントによって適合精度を調整できるところまできたが、適合精度と二次カリエスとの間に相関関係がないことなどが挙げられた。これまでの歯科技工を、より臨床に近いところで再考する必要があることから、両者の問題提起の回答を求める形で熊谷先生に引き継がれた。

「齶蝕も歯周病も本当はまれな病気かもしれない」

このことを痛切に思い知らせるカリオロジーとペリオドントロジーについての膨大な臨床データを含む講演には、参加者全員釘づけになっていた。また、危険因子に関する解明が進み、公衆衛生や学校歯科保険などマスとして対応していた予防が、個々の歯科医院のなかで、個々の患者に適切に行うことができるようになったこと。それにもかかわらず、皮肉にも現在の探針による学校検診や、それを受けて行われる安易な修復治療などのマスとしての公衆衛生のあり方や、現状の仕組みでの医療行為が、その発展を阻む形になっている点を挙げられた。

●歯科医療は変わり始めた

熊谷先生の講演の後、必ず出される質問は「こうした予防中心の医療をやっていききたいが、それでやっていけるのか」という切実な問題である。

日本の医療の仕組みは資本主義で営みながら報酬は社会主義的であり、能力、経験は問わない。筆者はこの仕組みを考え直す前に、

この仕組みに長年甘んじていたことをまず反省したい。そして患者がどんな病気を持っているかということに気を取られて、どんな患者が病気を持っているかということが後回しされていた。つまり患者の潜在的なニーズを忘れかけていたのではないか。

したがってこれからの医療は単に回復のための医療ではなく、患者自身も気づいていない本来の健康を創造していかなければならない。それにはまず歯科衛生士の自立が不可欠であり、歯科技工士と共に歯科医師のパートナーとして対等な立場で職務にあたることが重要である。ただ、それぞれの職責が違うだけで、患者から見れば違いはないのだ。

歯科医療に携わるわれわれが、本気でこのことに気付くことが本格的な解決になるのではないだろうか。歯科医師は歯科衛生士が働きやすい環境を整え、歯科衛生士は自立する。そして歯科技工士は納得のいく補綴物を作る。

歯を守るための医療技術は、ほぼ完成していることを悟らせてくれる一日であった。

(東京都渋谷区・協立歯科/中原悦夫)



▲今回の講師。左より桑田先生、加藤先生、熊谷先生